

# ブランニングの “Rabbi Ben Ezra”<sup>①</sup> に見られる人生の意味と価値について

渡 邊 清 子

はじめに

筆者が Robert Browning の詩集をひもといてから早60餘年の月日がすぎ去ってしまった。当初私の如く英語力のまだ足りなかった若輩の者にとっては、この詩人はむづかしくて歯が立たないであろうと言われた。しかし相当なあまのじゃくだった私は、それ以来とにかくこの詩人にとりつかれたように、こつこつと勉強を始めて今日に至った。

老年を迎えた今、Browning の言葉に励まされ、老いの賛歌である “Rabbi Ben Ezra” について書く機会に恵まれ、幸を齒みしめている次第である。

## “Rabbi Ben Ezra”<sup>①</sup> について

1936年の2・26事件を目撃した筆者の学生時代は軍部の荒々しい靴音が日本国中にこだました時であった。筆者はその頃、日本の将来はともかくとして、これから世界を、否宇宙を、揺がそうとしている目に見えない巨大な大きな力が蠢くのを感じ、暗澹々たる気持ちに落ち込んでいた。その当時の若者たちがよく考えたように筆者も、人生とは何か、我々の生きる目的は何か等と考え、果しない懐疑的な思想の虜になっていた。

そのような或る日、たまたま図書館で開いた齋藤勇の「英詩鑑賞」<sup>②</sup> の中に掲載されてあった Browning の “Rabbi Ben Ezra” の研究に出合った。思想

① 本論文に引用される詩は下記の全集からのものである。

Sir F.G.Kenyon: (With introduction by); *The Works of Robert Browning: Centenary Edition in Ten Volumes*, (Ams Press, Inc., New York, 1966) Vol. 4

② 齋藤勇譯註: 「英詩鑑賞上巻」(研究社, 東京1924)。

的な大傑作である此の作品によって筆者は目の前を閉ざしていた暗雲が開けたような感激をおぼえた。それ以来この作品に盛られた思想によってどれだけ力付けられ、励まされてきたか計り知れない。去る1969年にアメリカのアポロが月面着陸を果たした時、筆者は思うことがあり、大学で発行されている論集の中に Rabbi Ben Ezra 関することを少し書いたことがある。が今又人生の大きな節目に区切りをつけるにあたり、もう一度この作品をくわしく読み直し “the meaning and value of life” を考えて見たいと思う次第である。

Ben Ezra は凡そ1092年に Spain の Toledo で生れ、1167年に Italy の Rome で死んだユダヤ教の ‘rabbi’ 即ち律法学者であった。そればかりでなく彼は天文学や医学にもよく通じ、旧約聖書の注釈者としても有名であった。彼は一名 Ibn Ezra とも Abenezra とも呼ばれている。彼の著作物は概ね五十歳以後の円熟期に書かれたものと言われる。その思想内容は大体 Browning のものと似通っていて、老年礼賛の人生観をもっていたとされる。しかし Browning が昔日に現存していた歴史上の人物 Ben Ezra に多少影響され、その名を借り、一人の登場人物を仕立て上げた。しかし彼はあくまでも自分自身の信じる所を明確に丹念に、soliloquy の形で述べさせているのである。この点について、Robert Browning のことを個人的に熟知して居り、彼の詩を全集に編み発行した F.G. Kenyon が、コメントをしているので引用しておく。

Browning was fond of out-of-the-way scraps of Rabbinical learning, but although the thoughts expressed in the poem have some relation to Ibn Ezra's own opinions, their value as poetry is independent of any dramatic fitness. The poem... is a direct and personal utterance... ; and it deservedly ranks among the best loved of his lyrics.<sup>③</sup>

Kenyon のいうようにこの詩に盛られた思想は Browning の独自のものであると言ってよいであろう。

---

③ Sir F.G.Kenyon; *The Works* : Vol.IVpp.XXX~XXXI

“Rabbi Ben Ezra”は1864年に、Browningの52歳の時、*Dramatis Personae* (登場人物) という詩集の中に初めて所載され、出版されたのである。しかしこの作品がいつ書かれたものか時期はさだかでないらしい。

Kenyonは大方1859-60年の間であろうと言うがWilliam Clyde DeVaneによればこれは1862年前に完成されていなかった可能性があるという。その理由として彼は次のようなユニークな発言をしている。“It seems likely that the spark which caused Browning to write the poem was unconsciously supplied by Edward FitzGerald. Fitzgerald had printed the pamphlet, *The Rubāiyāt of Omar Khayyām*, in 1859…”<sup>④</sup> それでもまだそれはどこでも販売されていなかったのをDante Gabriel RossettiとA.C.Swinburneが手に入れて来て読んだらしい。FitzGeraldによるその訳詩をおそらくRossettiが親しかったBrowningに読ませたのだろうとDeVaneは推測する。その理由は“…Browning’s philosophy of life which he puts into the mouth of the Rabbi, meets squarely the way of life which is laid down by the Persian tent-maker.”<sup>⑤</sup> だからだと証言する。殊に“Rabbi Ben Ezra”の中の26~32連の‘potter’s wheel’のイメージの扱い方が彼独特のものであると言う。Browningが*The Rubāiyāt*の影響を受けた、うけないの論争はW.L. PhelpsやE.L.Cary等多くの研究者の反論に合い、下火となった。それはBrowningの詩の方が種々なる学究的な証明により、彼の独自性が見え、優れていると言うので、多くの支持者を得たからである。

筆者はかつて「E.FitzGeraldの *Rubāiyāt of Omar Khayyām*—その成り立ちと思想について」<sup>⑥</sup>という小論を書いたことがある。その時筆者はBrowningの“Rabbi Ben Ezra”が“Rubaiyat”の思想と正反対のものであること

---

④ William Clyde DeVane: *A Browning Handbook*(F.S.Crofts & Co., New York, 1935)p.259

⑤ *Ibid.*,p.259.

⑥ 「日本女子大学英米文学研究」第6号(1971年)

を指摘した。“Rubáiyát”は“Eat, drink and be merry, for tomorrow we die”と端的に言えばepicureanism的刹那主義の思想を主張している。それに反してこれから読んで行く“Rabbi Ben Ezra”は人生の深遠なる意味とその価値を解き、人々に生きる希望を湧き上がらせる力強さをもって迫ってくる所がある。Browningが“Rubáiyát”を読んで、刺激されて詩を書いたか否かは別問題として、こゝに、異なる二つの思想の対決をみる思いがする。窮極的には種々なる論争があったにもかかわらず、DeVaneは“The poem is chiefly valuable as an expression of Browning’s own faith”<sup>⑦</sup>と評価し、更に“Rabbi Ben Ezra has, of course, become one of the most famous and most popular of Browning’s poems, perhaps because it expresses better than any other poem the peculiar quality of robust hope and cheerfulness which is Browning’s contribution to the spirit of English literature.”<sup>⑧</sup>と高く賞賛するを惜しまない。

さて、以上のような論争はまだ多くあるとしても、それはさておき、筆者はこの偉大な詩そのものに目を向けて行きたい。“Rabbi Ben Ezra”は各連6行からなる詩で、32連続きの読みごたえのする長編ものである。いつものことながら、Browningの作品は訳しただけでは理解し難い。それで今回も訳を施したり、解釈を試みたりして、詩人の意とする所を出来るだけ正しく汲み取るように努力してみたいと思う。

最初の一連は序文的な役割をもつ。初めの一連と二連をよむと詩人は話の聞き手を一人の若者と想定しているように思われるかも知れないが、読んで行くうちにどうもそれだけではなく、老人も含めてあらゆる層の人々に語りかけているsoliloquy(独白)のように思われてくる。詩人はまず次のように人々に呼びかける。

---

⑦ W.C.DeVane: *A Browning Handbook*’, p.260

⑧ *Ibid.*, p.260.

## I

Grow old along with me!

The best is yet to be,

The last of life, for which the first was made :

Our times are in His hand

Who saith "A whole I planned, 5

"Youth shows but half ; trust God : see all nor  
be afraid !"

さあ、さあ、老いたるものよ、若き者のよ来れ、私と共に老いて行こう！老いについて考え、語ろう。人生に於ける最高最善の時はまだ来ていない。これからだ。生命の終り（つまり最高の時、詩人にとっては神のもとにみまかる日）のためにこそ、いのちの初めはあるのだ。生命の初めは円熟した老年を、又終りの時を迎える準備の時である。地上において我々に与えられた時は皆、神のみ手のうちにある。その神はかく言い給う、「凡てことを私が企てた。青年の時は一生の半ばにしかすぎない。神を信じよ。広い視野ですべてを見よ。そして恐れるな！」この一連はまさに老境の大切さ、その意味の深さを賛え、教えている。と同時に神を信頼し、その前にぬかずき、凡てを委ねまつる人間 Browning の面影をしのばせている。今見て来たように彼は老齢の大切さを説きそれを賛美する。

英国でも例にもれないことであろうが、現代の日本では老齢化が非常な速度で進み、老人問題が国家の一大事となり、その対策を講じるため、あれこれと討議が重ねられている。老いた人々は寄る年波に抗す、すべもなく、心細く、辛いおもいに閉ざされている。これらの人々に対して Browning は何と慰め、励ましの言葉を述べられるのであろうか。

第二連から四連までは人生の尊さ、貴重さ、等の理由を述べて行く所である。第二連を見てみよう。

## II

Not that, amassing flowers,  
Youth sighed "Which rose make ours,  
"Which lily leave and then as best recall?"  
Not that, admiring stars, 10  
It yearned "Nor Jove, nor Mars ;  
"Mine be some figured flame which blends, tran-  
scends them all!"

若者たちが数多の花を山程積みあげて、「どのばらを我がものにしようか、どの百合を、これぞ最高のものよ、と言えるように残しておこうか」等と溜め息をついたりするのを、私はとがめだてしようとするものではない。又空に瞬く星を仰ぎつゝ「我の求める星は木星ではない、さりとて火星でもない、我があこがれ望むのは、それら凡てをませ合わせた、それらに勝る美しい炎の如く輝けるもの！」となげき、切望したとしても私は非難しようとは思わない。詩人はその理由を以下の如くのべる。

## III

Not for such hopes and fears  
Annulling youth's brief years,  
Do I remonstrate : folly wide the mark ! 15  
Rather I prize the doubt  
Low kinds exist without,  
Finished and finite clods, untroubled by a spark.

花や星に対する思いや、恐れのために、短い青春を没頭させ、無駄にしていることを、どうして私がとがめだてするであろうか。それは当たらざる、考えも及ばぬ愚かなことである。それとは反対に私がむしろ重んじ、大切に思っているのは懐疑の心や、あれこれと思い煩い不安になる心である。即ちこれらは

向上心の源となるものであるからである。これらのものは一つの輝く閃光にも心動かすことのない、これ以上発達することもない、完成した、有限な土くれの如きもの、持ち得ぬ宝であるからである。Browning はすでに完成し、成長する余地なきもの、又疑惑や感動を持たぬ者は、土くれにも等しい人間とみなし、卑しい動物に等しいものと考えていたから、こう言うのであった。

#### IV

Poor vaunt of life indeed,  
Were man but formed to feed 20  
On joy, to solely seek and find and feast :  
Such feasting ended, then  
As sure an end to men ;  
Irks care the crop-full bird ? Frets doubt the  
maw-crammed beast ?

Ⅲ連に述べたような心を持たぬ人がもし歡樂のみを求め、それを得て、それに飽きたり、貧り食するように造られていたならば、宴樂が終わった時には人間共の終りがくるだけである。誠にそれは何とあわれな人生の誇りというべきか。食べ飽きた鳥が愁いや悲しみのため苦しむことがあり得るだろうか？満腹した獣が懐疑の心を抱いて焦燥することがあり得るだろうか？（歡樂のみを追い求める人間はこの禽獣に等しいもの、との意）

#### V

Rejoice we are allied 25  
To That which doth provide  
And not partake, effect and not receive !  
A spark disturbs our clod ;  
Nearer we hold of God

Who gives, than of His tribes that take, I must  
believe.

30

創世記 I 章26節に記されている如く、神はこの世を創造され、神御自身の姿に似せて、人類を造られ、万物を世に与え給うた。神は与え給うたが、他より何も受け取られない。備え給うが、取り給わぬ。その神の法に従って我々が生きることが出来るのは、何と喜ばしきことよ！天より与えられた輝く知性の光 (spark) はより高きを求める我らの体と心とをゆすぶり、奮い立たしめる。神より貪り取る人間 (生物) 達よりも我らは神により近くあるを信ず。

さればこそ Browning は次の如く我らを励ます。

VI

Then, welcome each rebuff  
That turns earth's smoothness rough,  
Each sting that bids nor sit nor stand but go!  
Be our joys three-parts pain!  
Strive, and hold cheap the strain ;  
Learn, nor account the pang ; dare never grudge  
the throe !

35

神は我々の側に立ち常に我らと共にある。それ故、我々のこのなだらかな大地を覆し、凹凸だらけに粗くし、居ても立っても居られないような困難を与え、なお前進せよ、と迫まれても、それらの苦しみを喜び迎えよ。我らの喜びは三倍の苦しみと見よ！即ち喜びの四分の三は苦しみとみよ！励めよ、我らに求められたる努力を惜しむなかれ。学べ、苦痛を数え立てずに、戦え、死の苦しみさえも厭はずに！

VII

For thence, — a paradox



Which comforts while it mocks, —  
Shall life succeed in that it seems to fail :  
What I aspired to be, 40  
And was not, comforts me :  
A brute I might have been, but would not sink  
i' the scale.

上記の連では人生を一種の学び舎とみなしていることがわかる。我々の一生はより高きを望み、それに到達しようと努力する為にある。しかしもし自分が懸命に努力しても、敗北したならば、それはかえって自分を力づけ、希望を持たせることになる。つまりそれは日本で言う「負けるは勝ち」という逆語に当たると言う。敗北してもそれが行き詰まりではなく、次の勝ちを得んがため、努力し、励まうとする希望を湧き立たせるものとなるからである。それ故、「我憧れたれど、成し得ず」ということは、逆説的にみえるかも知れないがそれはむしろ私を慰める。それは進歩することを望まぬ進歩なき獣に成り下りそうだったのをそうさせずにすんだからである。

### VIII

What is he but a brute  
Whose flesh has soul to suit,  
Whose spirit works lest arms and legs want play ? 45  
To man, propose this test —  
Thy body at its best,  
How far can that project thy soul on its lone way ?

VIII連では霊と肉との関係に触れて行く。肉体そのもののみに迎合し、霊の悩や憧れに頓着しない精神しか持たぬ人間、又いたずらに手足を動かすことしか知らない心しか持たぬ人間は、獣でなくて何であろうか？彼に次の問題を投げかけてみよう、—汝の肉体がどんなに優れていても、宇宙の大いなる霊（“uni-

versal soul”) と離れていれば、汝の肉体に結ばれている孤独な霊の働きはいかなるものとなるか、それを助成することが出来るかどうか—考えてみよ、と。その時は精神を主体とし、肉体はその従であるとすれば良いであろう。

## IX

Yet gifts should prove their use :

I own the Past profuse

50

Of power each side, perfection every turn :

Eyes, ears took in their dole,

Brain treasured up the whole ;

Should not the heart beat once “How good to  
live and learn ?”

前の連で Browning は肉体よりも霊を重んじているかのような表現をしていると思われる所があったかもしれない。が決してそんなことはない。ただ霊的なものを全く伴っていない時のことを警告しているにすぎない。彼は決して肉体を卑しめるような禁慾主義者ではない。彼は神の造り給うたものは皆有益なるもの、即ち神よりの 'gifts' 即ち賜物と考えていた。たゞ、人間にあたえられた機能にはそれぞれの大切な素晴らしい効用のあるを忘れてはならない。若かりし頃、過ぎし日々 に於いて肉体はあらゆる点で力に満ち満ち、凡ての方面に優れ、完璧であった。目も良く見え、耳もよく聞こえ、頭脳は明晰であり、凡てのことを完全に秘蔵することが出来た。今まで生き甲斐ある日々を送って来た。それなら心臓も高らかに「生き、且つ学ぶことはいかに幸なるかな！」と鼓動してもよかったのではないだろうか？と彼は神の給うた肉体の素晴らしさを賛える。

ついでX連では神に与えられた御業に感謝と讃美を捧げる。

## X

Not once beat "Praise be Thine!

55

"I see the whole design,

"I, who saw power, see now love perfect too :

"Perfect I call Thy plan :

"Thanks that I was a man!

"Maker, remake, complete, - I trust what Thou  
shalt do!"

60

老いて達観の境に至った1人の人曰く：心が何回どきどきしたことか、「御神はほむべきかな！御神の御経綸と御計画を悉く我は見た。先には御神の全き力を、今や、全き愛をも見る。我は御業の全きを賛え、人として生れ出でたるを感謝し奉る・造り主なる御神よ、我を新たに更生せしめ、悔いなき完き老後を与え、永遠の生命を授け給わらんことを。我は御神のなし給う凡のことを信頼し奉る。」これは詩人の神に対す深い愛の告白である。

## XI

For pleasant is this flesh ;

Our soul, in its rose-mesh

Pulled ever to the earth, still yearns for rest ;

Would we some prize might hold

To match those manifold

65

Possessions of the brute, - gain most, as we did  
best!

すでに明らかにした如く Browning は神の給うた肉と霊とを共に尊んだ。この連にもよくそれが伝えられている。彼は率直に現し世を肯定し、次のように大胆に言う。肉の生活は何と楽しいことか。我が霊はそれを包む肉にまつわる快楽や欲望故に、安らぎを求め、憧れを抱きつつも、絶えず地下に引き下ろさ

れている。我らもこの美しいばら色の肉体がもっているものに匹敵するような宝を手に入れたいものと思う。もし我らの霊が最善をつくすならば、最高のよきものをつかみ得よう。しかし肉体がわが霊を助け、霊も又それに応じて最善をつくすならば報償も多くなり、霊肉一致の良き業の実現が見られることになるものだ、と説く。

## XII

Let us not always say

"Spite of this flesh to-day

"I strove, made head, gained ground upon the  
whole!"

As the bird wings and sings,

70

Let us cry "All good things

"Are ours, nor soul helps flesh more, now, than  
flesh helps soul!"

「今日私達は肉の悦びを禁じ、これを避けて、務にはげみ、懸命に突進したので、かなりの進歩をした」といつも言わないことにしよう。こゝで注意したいのは詩人が大いなる進歩と言わないで、かなりの又は相当の進歩と言った所である。粗食と禁欲に耐え難行苦行しても差程の大進歩があったわけではないから、そんなことを誇りにしないで肉体も大事にした方がよい、と多少皮肉を言っているように思える。鳥が大空にはばたき、うたうように、我らも「凡ての善きものは我らのもの、今や肉が霊を助ける以上に、もっと霊が肉を多く助けている、とは言えない、と叫ぼうではないか！」という。即ちこの連では「霊肉相互の助け合い」を強張しているのである。

## XIII

Therefore I summon age

To grant youth's heritage,  
 Life's struggle having so far reached its term : 75  
 Thence shall I pass, approved  
 A man, for aye removed  
 From the developed brute ; a god though in the  
 germ.

上記の如く霊肉併行論を提唱して来た詩人は老人を呼び出し、論を展開して行く。老いたる人も、彼の初めの半生に於いては青年特有な悩や懷疑や、様々な苦しみを経験して来た。しかしそれを経て来たればこそ、今それらが彼の後半生に役立っていることを認めなくてはならない。そして今彼は人生の半ばを過ぎ、人生の戦いは終りに近ずいた。これからは一人前の人として認められ、進化した獣の域を脱却し、いまだ未熟ながら神性の芽生えらしきものをもって進み行きたいものである。

XV

And I shall thereupon  
 Take rest, ere I be gone 80  
 Once more on my adventure brave and new :  
 Fearless and unperplexed,  
 When I wage battle next,  
 What weapons to select, what armour to indue.

年老いて、神の御姿に似た微々たる我なれど、来世で再び、新しい勇敢な冒險的戦いにいどむ前に休みを取って置こう。善く戦うためには善く憩うことが、大切であるから、戦いにて、いかなる武器を選ぶべきか、いかなる鎧を用いるべきか等と、恐れ、まどうことはせぬ。常日頃それらのものは準備しておくべきものだから、と Browning は彼特有の来世観をこゝで述べている。この思想は必ずしもユダヤの Abenezra のものとは限らない。Browning の他の作品の

中に度々この来世観はみられるからである。

XV

Youth ended, I shall try

85

My gain or loss thereby ;

Leave the fire ashes, what survives is gold :

And I shall weigh the same,

Give life its praise or blame :

Young, all lay in dispute ; I shall know, being old. 90

我が青年期は終った。今や老境に入りたる故こゝで我が青春は成功であったか否か調べてみよう。燃えて灰になったものは、そのまゝすておくがよい。しかし燃えずに残るものは黄金である。我はその黄金一つまり己の誠に貴いものや所業一を計りで量り、その目盛りによって、我が人生の誉れの高きか又低きかの価値を定めよう。青年期には万事が疑問の中にあり、判断は定め難い。されど、老いてこそ初めて己を知り、ものゝ真價が定まるものである、と言う。この思想はこの詩の書き出しの初めの所と、深い関連があることに注目したい。

XVI

For note, when evening shuts,

A certain moment cuts

The deed off, calls the glory from the grey :

A whisper from the west

Shoots — “Add this to the rest,

95

“Take it and try its worth : here dies another  
day.”

みよ黄昏の暗い雲が空を被い、一日が暮れようとする時、我らも一瞬仕事を止めて、灰色に薄れ行く余光の中で、その日一日のことを振り返りみる。その

時、静かな声が西方より聞こえて来る。「過ぎ去りし日々に、今日のこの一日をも加え、その真価を調べてみるがよい。こゝに又一日がすぎ去ったではないか」と。

XVI

So, still within this life,  
Though lifted o'er its strife,  
Let me discern, compare, pronounce at last,  
"This rage was right i' the main, 100  
"That acquiescence vain :  
"The Future I may face now I have proved the  
Past."

そこで、今まで老年に至るまで、人生の苦悩や苦闘を乗り越えて来たとはいへ、今現世にあるうちに、越し方をよく見わきまえ、あれこれと比較し、反省してみる必要がある。「血気にはやって、やったことが、おおむね正しかっただろうか、又忍耐して黙従したことは無駄だったのか等と判断してみた。そして私は今この過去の経験をもとにして未来に立ち向かって行くことが出来るのである。

XVII

For more is not reserved  
To man, with soul just nerved  
To act to-morrow what he learns to-day : 105  
Here, work enough to watch  
The Master work, and catch  
Hints of the proper craft, tricks of the tool's true  
play.

人の力には限りがある。今日学んだことを明日行う。つまりその日、その日の仕事をする力と能力しかない人々がいる。彼らは此の世界では弟子が師匠の仕事の仕方を見習い、その仕事の秘訣を学び、使用する道具がどのような役目を果しているか等、熱心に努力して学ぶがよいと奨励する。年老いた Browning も 'Master' 即ち造り主なる神のイメージを用いて、我々凡人は各自に与えられた使命を果すための心得を習得するため、天賦の才能をいかに生かして役立たせるべきかを学ばねばならないと説く。そしてそのために我々は主なる神の御業に従い、示されるがまゝの道を歩きたい、との願望を披歴する。次の連に入るといかにも詩人らしい雄々しさが見えてくる。

XIX

As it was better, youth  
Should strive, through acts uncouth, 110  
Toward making, than repose on aught found made :  
So, better, age, exempt  
From strife, should know, than tempt  
Further. Thou waitedest age : wait death nor be  
afraid !

若者は己の技の末だに拙きをさと、技を苦心して研ぎ、自らのものを創作する方が、すでにあるものをあてにして安住するより遥かに良い。しかし試練を経て来た老人たちはこれ以上に冒険を企てたり、細かいことに心惑わされたりせず、真理を見極め、英知を養うことに心するとよい。「汝」は我が老齢に達することを心待ちにしていた筈だ。それ故、もはや死を覚悟し、恐れることはない筈。

詩中の114行は詩人自らの深い内省の独白として受けとめられ、彼の達観した境地が伺われる。



## XX

Enough now, if the Right

115

And Good and Infinite

Be named here, as thou callest thy hand thine own,

With knowledge absolute,

Subject to no dispute

From fools that crowded youth, nor let thee feel

alone.

120

今や老境に入り、正と善と無限のものを、(汝の掌を我ものなり、と自信をもって言える如く)、完璧な、すぐれた知恵でもって、判別することが出来るならば、それで十分に足りる。青年に群がってくる愚かな論争に妨げられることなく、それに参加したり、仲間に入れられないからとて、淋しがったりする必要はない。孤独になる必要もない。

## XXI

Be there, for once and all,

Severed great minds from small,

Announced to each his station in the Past!

Was I, the world arraigned,

Were they, my soul disdained,

125

Right? Let age speak the truth and give us

peace at last!

きっぱりと最後に、偉大なる心を矮小なる心から選別し、各人に過去に於けるその地位を明らかに告げしめよ。世の人々に咎め立てられた我が正しかったのか、それともわが魂を軽蔑した彼らが正しかったのか。その答が知りたい。しかし人格の判断の標準はつけ難い。それでも比較的ものごとを公平に判断出来る老境に入れば、正しく判断をすることも可能であろう。老齢をして公平な

る判断を下さしめ、心の安らぎを得たいものである。Browningは老後のつとめは英知を養い蓄えることにあると考えたが、こゝでも又次のXXII連でも問われているのはその働きの正しさと、その重要性であろう。

XXII

Now, who shall arbitrate?  
Ten men love what I hate,  
Shun what I follow, slight what I receive ;  
Ten, who in ears and eyes 130  
Match me : we all surmise,  
They this thing, and I that : whom shall my soul  
believe?

さて、例えば我と彼らを裁くにあたり、公平なる判断を下させるのに誰を判事を選ぶべきかゞ先づ難問題であろう。というのは人それぞれによって種々に異なる考え方をもっているからである。我の憎むものを十人の人が愛し、我が求め、従うものを排し、遠下げる。更に真実なるものとして我の受け入れるものを、取るに足りないものとして疎んじる。十人の人達の持っている目や耳は、我のそれらとよく似ているが、彼らは是を、我はあれをと推測する。ならば我が魂はいずれを正し、と信ずべきか？判断に苦しむばかり。

XXIII

Not on the vulgar mass  
Called "work," must sentence pass,  
Things done, that took the eye and had the price ; 135  
O'er which, from level stand,  
The low world laid its hand,  
Found straightway to its mind, could value in a

trice :

人のまことなる価値判断をするのに、世俗の者達がいわゆる「事業」と名付ける仕事の量でもって、とやかく判断を下すのは善くない。又俗人の眼に映じて評価される業績をもって判断を下してはならない。なぜならそれは低俗な世間の人々が、彼らの眼に映じたものを成し遂げた俗人と同じレベルに立って、それをみて、即座に、善し、悪しの判決を下したものであるからである。それらの業績が長い年月の間の高いレベルでの研究の成果であるかどうか、全く考慮に入れず判断しているからである。

XXIV

But all, the world's coarse thumb

And finger failed to plumb,

140

So passed in making up the main account ;

All instincts immature,

All purposes unsure,

That weighed not as his work, yet swelled the

man's amount :

しかし世間の人々が親指と中指を拡げて、ものゝ長さを測るような、そのような粗雑なやり方で、人格評価をした時に、見逃されたすべての業績や真価、又未だに熟し切れないでいるすべての本能、未だ確定し、実行に移し切れないまゝの志や企画、これら総てのものは、他の人の目に見えない業績として、数えられず、量り切れていない場合が多い。しかし、これらはその人の人格や人間性を重く、高く、大ならしめるものである。実際目に見えなくてもその芽生えこそが、価値あるもの、と詩人は明言する。これは Browning の常に力強く説く希望にみちた信念である。

Thoughts hardly to be packed

145

Into a narrow act,

Fancies that broke through language and escaped ;

All I could never be,

All, men ignored in me,

This, I was worth to God, whose wheel the pitcher  
shaped.

150

狭く固苦しい行為の中に詰め込むことが出来ない大いなる思想、言葉から脱出し、のがれ去る空想、望み願えどもかなえられなかった大志、達成し得なかった理想、自分にまさしく備わっているが発揮出来なかった才能や知能等は、世の人々に総て認められず無視されている。しかし以上に述べた俗人の目に見えぬ総てのものは、我を土くれより造り、轆轤の回転にて完成し給いし神の給うた我がもてる価値あるものである。神はこれら俗人の目にとまらぬものをも嘉みし給う。この轆轤のイメージは次にあげる聖書の中に書かれた箇所を念頭に置いて、詩人が信仰の一つの証として用いたものである。

「されど主よ、あなたはわれわれの父です。われわれは粘土であって、あなたは陶器師です。われわれはみな、み手のわざです。」(イザヤ書第64章8節)<sup>⑨</sup>

“み手のわざ”つまりみ手によって造られたもの、との意である。英語の聖書には“O Lord, thou art our father ; we are the clay, and thou our potter ; and we all are the work of thy hand.”とある。この陶器師のイメージは次の連にも続く。

聖書においては、神を陶器師にたとえ、人間はその陶器師の手によって、轆轤の上で回転された粘土から造られた pitcher (水差し) の如きものであるつまり魂を持てる人間に例えているのである。

⑨ 「聖書」日本聖書協会発行。(1981年)

## XXVI

Ay, note that Potter's wheel,  
 That metaphor! and feel  
 Why time spins fast, why passive lies our clay, —  
 Thou, to whom fools propound,  
 When the wine makes its round, 155  
 "Since life fleets, all is change ; the Past gone,  
 seize to-day!"

あゝ、我らの前に回転する陶工の轆轤の比喩の真意を汲みとれ。なぜ時はかくの如く速く過ぎ行くのか、なぜ神の手によって、形造られて行く粘土のように、汝はじっと受身の状態で横たわっているのか、一汝これらのことを考えてみよと、愚かなる者たちは酒盃を巡ぐらせながら汝に問題を投げかける。そして「時は矢の如くすぎ、万事流転するのみ。過去はすぎて戻らぬ。それ故に今日をこそ捕え、楽しめ！」と言う。これはまさしく「ルバイヤート」の中を流れる刹那主義の思想である。

## XXVII

Fool! All that is, at all,  
 Lasts ever, past recall ;  
 Earth changes, but thy soul and God stand sure :  
 What entered into thee, 160  
 That was, is, and shall be :  
 Time's wheel runs back or stops : Potter and clay  
 endure.

Browning は前連の如く現在主義や刹那主義を肯定する者を激しく叱る。「愚か者よ！」と。詩人によるといやしくも存在する価値あるもの故に、存在するものは、永久に存続する。決して呼び戻されて、消えて行きはせぬ。と強

調する。地と共にあるものは、地と共に移ろい行く。しかし汝の魂と、造り主なる神は変ることはない。汝の中に宿りたるもの、即ち宿りたる魂は絶ゆることなく、過去、現在、未来永劫に存在する。しかしこの世は「時」に司られ、轆轤によって回転されつゝ形作られているから、その過程に於いて轆轤にかけられる旋盤の回転によって、或時は反転し、後戻りし、或は一時停止することもあるだろう。だが陶工なる神と、作られた水差し、(1.150を参照)つまり靈魂を与えられた人間は忍耐しつゝ、永遠に存在し続けると、力強く確信をもって詩人は語る。

XXVIII

He fixed thee mid this dance  
Of plastic circumstance,  
This Present, thou, forsooth, wouldst fain arrest : 165  
Machinery just meant  
To give thy soul its bent,  
Try thee and turn thee forth, sufficiently impressed.

神は人間を造り、それに形をあたえるため、轆轤のまん中に、(舞踏の如き動きをさせるため)汝を固く止めてしまわれた。このことは汝が現在好んでしたいとのぞんでいたことなので、神は汝の靈に進むべき方向を与え、汝を試みた。これは汝が十分に満足して、満ちたりて、前進を果さんがための神の御心の成し給う所である。Browning がこゝで到達した一つの結論はやはり彼の優れた作品"Abt Vogler"の下記の一節の中にみられると思う。

There shall never be one lost good ! What was  
shall live as before ; (St.1X)

「善きことは一つだに消えることはない。ありしもの永遠に失せることなく存続す。」

詩人は続けて次の如く言う。それ故に我らが今与えられている轆轤の上での

形成の時こそ、我らが永遠の生命を得んがための準備の時である。神が我ら各に給うた性向や才能にもとづき、それを最善に生かして前進するよう心すべき時である、とこの連で強調しているものと思われる。

次の連は全く難解で困り果てた。

XXIX

What though the earlier grooves

Which ran the laughing loves 170

Around thy base, no longer pause and press ?

What though, about thy rim,

Scull-things in order grim

Grow out, in graver mood, obey the sterner stress ?

水差しの底の方のあたりに、青年時代の楽しい愛の経験を表わすような図が回転された陶土に、もはや、へらで刻み込まれていなくても、それがどうだと言うのか。更に又水差しの上部の縁のあたりに、死の形相をした、もの凄い様子の髑髏の姿が、まるで死後のことを思わせるように刻みつけられていたとしても、それが何だというのであろうか。と Browning は書いているが、その意図することが、はっきりしないので困った。恐らく彼は造られたそのものゝ良し悪し、図柄の出来、不出来等の外面的なことは問題にならない。それよりその作られたものゝ用途（即ちそれがいかなる役目を果せるか）こそが、その真價を定めるための尺度であると考えたのではないかと想像される。

XXX

Look not thou down but up! 175

To uses of a cup,

The festal board, lamp's flash and trumpet's peal,

The new wine's foaming flow,

The Master's lips a-glow !

Thou, heaven's consummate cup, what need'st  
thou with earth's wheel ?

180

この連は前のものと異なり、陶工の手によって作られ、完成された一つの作品として杯に語りかけるものとなっている。

汝、杯よ！頭をたれて地上に目をとめず、天を仰ぎみよ！自分は神の御手によって作られた杯であることを自覚し、己がいかなるお役に立つかを考えてみよ。祝宴のむしろは開かれ、灯火は輝やき、主なる神の唇は赤く照り映える。汝、神の御用に役立つ完全なよき杯とされた光栄を知れ。これ以上に汝につけ加えられるに必要なものは、もはやなくなった。されば地上のいかなるものも、地上の轆轤さえも、汝と何の関わりがあろうか？ない。もうろくろの上で回転される必要はなくなったというのである。

William O. Raymond は彼の論文 *The Infinite Moment* の中でこの XXX 連の見事な picturesque な image を讃えて “Images of light, sound, and motion are conjoined in the triumphant close of “Rabbi Ben Ezra,” where the philosophic argument of the Jewish sage takes imaginative wings :”<sup>⑩</sup> と述べている。

XXXI

But I need, now as then,  
Thee, God, who moulded men ;  
And since, not even while the whirl was worst,  
Did I, — to the wheel of life  
With shapes and colours rife,  
Bound dizzily, — mistake my end, to slake Thy

185

---

⑩ Boyd Litzinger and K.L.Knickerbocker (editors) : *The Browning Critics* (University Of Kentucky Press, New York, 1965) p.240.



thirst :

我はもう主なる神によって、お役に立つ完全なものとされたとはいえ、人々を創造された御神、以前のかの時と同様に、今もお我は御神を絶対に必要としています。種々なる形あるもの、色あるもの、等を作り出す轆轤につながれ、苦難をなめた時でさえ、我は決して主の御渴をいやすという我が望み我が目的を忘れ、誤まったことはないのです。

XXXI

So, take and use Thy work :

Amend what flaws may lurk,

What strain o'the stuff, what warpings past the aim !

My times be in Thy hand ! 190

Perfect the cup as planned !

Let age approve of youth, and death complete the  
same !

それ故に主の作り給いしこの杯を、この我を、取り用いたまわらんことを。これに潜むいかなる瑕をも直し、その地質のひゞわれや、御心になかわぬ歪みを正されたまわらんことを！我が日々の時、我が命、すべては主の御手のうちにあり！老齡なる者には、青年を認めしめ、死には老齡を完うせしめんことを。これは老いた詩人の敬虔なる主への祈りである。つまりこれは老齡の詩人が死によって、その務めを完うし、新しい世界に、神のみもとに甦ることを乞い願う心情以外の何ものでもない。詩人の神に寄せる熱き信頼と愛の祈りである。

難行しつつ、やっと今こゝに最終の連まで、半ば訳を、半ば解釈を試みながら辿りついた。しかし省みて、これだけでは Browning がこの詩の中で述べんとした “meaning and value of life on earth” を十分に伝えているとはいえない物足りなさが感ぜられてならない。それで重複する所があることは承知

の上で、32連を通して、諸家の指摘する重要だと思う所に留意しつつ、あらましの筋をたどっておこうと思う。

Stopford A. Brooke は複雑にして難解だと思えるこの詩全体をさりげなく簡潔明瞭にまとめているので紹介しておこう。

In *Rabbi Ben Ezra*, a masterpiece of argumentative and imaginative passion—such a poem as only Browning could have written,...he applies this view of his to the whole of man's life here and in the world to come, when the Rabbi in the quiet of old age considers what his life has been, and how God has wrought him through it for eternity.<sup>①</sup>

この詩を批評するにあたり Mrs. Sutherland Orr は開口一番この作品の出だしの所の以外性につき語り、最も著しい特徴は老年の賛歌である、と強調する。

The most striking feature of Rabbi ben Ezra's philosophy is his estimate of age. According to him the soul is eternal, but it completes the first stage of its experience in the earthly life ; and the climax of the earthly life is attained, not in the middle of it, but at its close. Age is therefore a period, not only of rest, but of fruition.<sup>②</sup>

昔からうつろい行く若さと青春、失われる美と力は惜しまれて来た。近づく老いと死の恐怖に人間はおのゝくものとされて来た。しかし Browning は実り多き良き時代は老年こそであると高らかに歌い、人々を驚かせた。青年時代はまだ空想的で疑惑に陥入りやすく、希望に燃えてはいるが、未完成で、神の全

---

① *Stopford A. Brooke: The Poetry Of Robert Browning* (Thomas Y. Crowell Company, New York, 1902) pp.148-49.

② *Mrs. Sutherland Orr: A Handbook To The Works Of Robert Browning* (G. Bell and Son, Ltd., London, 1927) p.205.

計画の一部にしか達していないのである。人生がより高き理想を求め精進して行く<sup>まなびや</sup>学舎であるならば、その途上にある若者が戸惑うことは当然なことである。高きを望みて、それを成し得ずとも、低きに安んじて止まるより、煩悶、若惱する方が勝ると神は思し召される。老年はいたずらに憩いを求める時にあらず、若き日の総決算をする実りの時であると励ます。(I-IV連)

もし我らがより高きを望む靈性を持たず、努力を惜しむ土くれにすぎないものであるならば禽獣に等しく、みじめな存在であろう。しかし聖書の創世紀I章26節に示されているように、我ら人間は神の姿に似せて造られたもの故、何と幸なることだろう、と詩人は高らかに声をあげる。(V)

我らを作り給うた神は、我らを不完全なまゝ放置されない。我らをより完全な良きものに近づかせるため、多くの困難や苦しみの試練に合わされる。W.L. Phelpsはこの試練に事寄せて次の如く解説する。They are (試練のこと) part of the divine machinery employed by infinite wisdom to further human development, to make us ultimately fit to see His face. There can be no true progress without obstacles: no enjoyment without its opposite: no vacation without duties: no virtue without sin.<sup>⑬</sup>

この世での成功、不成功は、その人の成せる個々の事業や業の大小により量り知られるものではない。詩人に言わせると、高きに憧れて成さんとして(他人の目からみて)例え成し得ずとも、低きを望んで楽々となし得たことより遥かに神の御目からみれば「善きかな」である。正に苦難の道を踏みつゝ奮起努力する人生こそ、価値ある人生ぞと我々を励ます(VII)。彼は成功や失敗は厳密に言えば人の目には見えない基準によって評価されると言う。つまり彼が成し遂げた結果だけをみて評価するのでなく、彼が成さんとした事柄の高く尊きか否か、又それを成さんとした努力がいかなるものであったかによると言うのである。この思想を強烈によく表わしているのは詩人の傑作「文法学者の埋葬」

---

⑬ William Lyon Phelps: *Robert Browning How To Know Him* (The Bobbs-Merrill Company, Indianapolis. 1915) p.340

(“A Grammarian’s, Funeral”)と「アプト・フォグラア」(“Abt Vogler”)である。筆者はこの二つの作品についても今回かく積りであったが、時間のやりくりがうまく行かず“Rabbi Ben Ezra”だけに絞ってしまったことは残念であった。又いつの日にか書き添えたいと願う。さて、こゝで又“Rabbi Ben Ezra”に戻ってのべて行こう。

この地上に於ける生活が、我々の靈魂の發展のためのまなびやであるからとて、靈のみを肥やし、肉を軽じてはならないと詩人はさす。健全なる靈を宿すためには、肉体も健全であらねばならない。肉体が弱体になれば、どうして靈を守り、その發展を助け得るであろうか。肉体は肉体として、その五感や六感を働かせ、靈を助けなくて何とする？詩人は靈肉一致の思想を高く評価する。(Ⅷ～Ⅻ)

世間の俗人達は明智を持たず、ことの善悪美醜を掌を指す如く簡単に、議論し、考える餘地を持たず判断し評価する。彼らは正しく判断する量りを持たず、基準も持たない。それ故我らはそれらに煩わされず、各人が真に定められた役目はどこにあるかを、考えるべきである。我らの造り主なる神、陶工なる神の御旨に添って、各人は目的をあたえられ、きたえられるものである。されば我らはその目的にかなうべく努力しよう。御神のたすけにより御旨のまゝに。Browningの力強い言葉が餘韻をもって響く。

#### 終りに

この作品について研究者達の批評や意見は多くあるが参考のためにこゝに一つだけ挙げておくことにした。

Browningを敬愛し、彼の文学に精進していた Arthur Symons は次の如く称賛する。

In *Rabbi ben Ezra* Browning has crystallized his religious philosophy into a shape of abiding beauty. It has been called, not rashly, the noblest of modern religious poems. Alike in substance and in form it belongs to the highest order of meditative poetry ;

and it has, in Browning's work, an almost unique quality of grave beauty, of severe restraint, of earnest and measured enthusiasm.<sup>⑭</sup>

そして更にそれが人々にあたえる影響の大なる理由を以下の如く指摘する。

"*Rabbi ben Ezra*" ...:is a light through the darkness, a lantern of guidance and a beacon of hope, to the wanderers lost and weary in the *selva selvaggia*. It is one of those poems that mould character."<sup>⑮</sup> とのべ幾つかの連をその例として挙げる, XXIII, XXIV, XXV, XXXII 等。これらの連は特に "... have the chastened, sweet gravity of wise old age."<sup>⑯</sup> と誠に良い評価をしている。

---

⑭ Arthur Symons: *An Introduction To The Study of Browning* (J.M.Dent & Sons Ltd., London, 1923) pp.147-148.

⑮ *Ibid.*, p.147.

⑯ *Ibid.*, p.148.